

## 入選

「もつたいたい」で世界を救え!

福井県 越前市立万葉中学校

三年 大道 優香

「もつたいたい」 という言葉、皆さんはもちろん知っていますよね?この言葉は外国でも、"mountain"で通じるそうです。そしてこれは、資源や水の無駄使いを無くす魔法の言葉なのです!

冬にこんな出来事がありました。

私がお風呂に入ろうとすると浴室は完全に冷えていて、お風呂どころではありませんでした。そこで私は少しの間だけ、浴室を暖めるために先にシャワーを出しました。その間私は「少しだけ」と思い、暖かいリビングに戻りましたが、テレビでは面白い番組が放送されていて、「少しだけ」のつもりが私はついリビングに長居をしてしまいました。すると、お母さんに

「水がもつたいたいから早く風呂入って。」  
と言われてしまいました。

「もつたいたい」という言葉は耳にタコができる位聞いたことがあるはずでした。なのに、なぜかそのとき言われた「もつたいたい」には特別な響きがあるように感じて、妙に納得したり心に残ったりしました。

それから私は春になりだんだん暖かくなってきたこともあってシャワーの流しっぱなしをしないようになりました。さらに、私の心の中の「もつたいたい」は大きくなり、歯磨きや手洗いのときにも、少しの水も無駄にしないよう気をつけるようになりました。

しかし、そんな毎日を通してあるとき東日本大震災は起きました。テレビの向こうには津波や倒れた家々など恐ろしい風景が広がっていて、私は本当に悲しい気持ちになりました。その中で私の目を引いたのは、震災の影響等で水がいきわたらず困る人々の姿でした。

まず見たのは、銭湯に入るために人々がつくる長蛇の列でした。水が不足しているため、お風呂に入れるのは一週間に二、三日なのだそうです。それを見て私は、なんて自分は今まででいたくなく暮らしをしていたのだらうと痛感しました。お風呂に毎日入るのは「普通」じゃないことを見せつけられてるよう

な気がしてたまりませんでした。

次に見たのはスーパーや自動販売機で水を大量に購入する人々でした。その人たちは放射線に少しだけ汚染されている水道水を恐れ、こういったことをしているのです。ニュースで見える限りではその水道水は人体に影響はないと言っているのですが、放射線という見えない恐怖から逃れるためにはその道しか無かったのかな、と思いました。ある日、友達が自動販売機で水を購入していたのですが、その時私の頭の中に浮かんだのは、ニュースで見た、水の部分だけ「売り切れ」の文字が並んだ自動販売機で、私は少し複雑な気持ちになりました。それは震災で東日本と西日本はまるで別世界のように状況が違っているということを改めて実感したからです。

悲しいことですが、私は東日本大震災を通して、私の「水」に対する認識の甘さを知ることになってしまいました。人間は水に大きく支えられているんだ、と心底感じたのはこれが初めてだったのです。

これらの体験を通して私はより一層水を大切にしていきたいと思うようになりました。これまで気を付けていたことに加え、トイレでの二度流しはしない、「大」と「小」を使い分ける、といったこともするように努めています。

そして、このような活動はみんな、長期間することにより意味のあるものになっていくと思います。そこで、私は「もつたいたい」を節水の合言葉にすべきだと思いました。この言葉を合言葉にすればみんなが気軽に、そして無理なく節水を続けられると思うからです。

「もつたいたい」の輪は世界中に広がっています。私たち皆の努力が少しずつでも実を結んで大きな力となりますように。

## 入選

### 二十ccの牛乳から学んだこと

静岡県 学校法人興誠学園浜松学院中学校

三年 林 佑亮

普段、目にしている水は人間にとって、生きるために重要な要素の一つだ。先進国では、水道の蛇口をひねれば、いとも簡単にきれいで安全な水が流れ使っている。水は、飲み水、調理の水、食器を洗う際に使う水、洗濯の水など、様々な用途があり、挙げれば挙げるほど枚挙に暇がない。水は、限りのある資源であることは周知の事実である。しかし、日常生活を振り返ると、意識せずに水を使っていた。特に、夕食後、母の手伝いをしながら食器を洗う時、たくさん洗剤を付け、残り汁もそのまま排水溝に流す。また、間食の時に飲んだジュースや牛乳もそのまま流して捨てていた。

ある日、テレビを見ていると興味深い番組をやっていた。「魚が住めるようになるまで、味噌汁を薄めよう。」といった趣旨だった。テレビ番組の情報を鵜呑みにするのはなく、実際に、自分でも実験をして確かめてみることにした。私は味噌汁を使うのではなく、毎日飲んでいいる牛乳を使うことにした。まず、二十ccの牛乳を用意し、大きなバケツに入れる。次に、二百ccの計量カップに水を汲み、牛乳の入ったバケツに入れる。この水を汲み足す作業を繰り返すことで二十ccの牛乳が何ccの水で薄まりきれいになるのかを検証する実験だ。実験をする前、私は二十ccの牛乳なら、百倍の二千ccつまり二リットルで透明な水になるのだろうかと思いをたてた。

一杯目、二杯目と順々に水を汲み足していった。しかし、十杯目までは白みが強く、一目で牛乳であることがわかった。さらに、二十杯目になると、白色が薄まり灰色のような色になった。しかし、まだ透明なきれいな水とは呼べなかった。諦めず、私は水を足し続けた。すると、百杯目に近づくと段々と灰色が薄まってきた。そしてついに、百十五杯目にして、バケツの底が見えるようになった。しかし、無色透明な水にはならなかった。百十五杯目以降も、水を何度も汲み足したが結果的には、百十五杯目の色と変化はなかった。つまり、私の実験では百十五杯目までが、牛乳を水で薄める限界だったのだ。結

果 二十ccの牛乳をバケツの底まで見える色に水できれいにするまで、千五百倍の二万三千ccに三リットルの水が必要だった。今回は、二十ccの牛乳という小規模な実験だったが、汚水の量が大きくなればなるほど、水を浄化するのには大量の水が必要だ。また、私は日常生活の中でどれほど多くの水を汚してきたかを思い、申し訳なくなつた。

この実験結果を社会科の先生に伝えると、先生は、水の問題は多岐にわたり、水質汚染以外にもあると実例を挙げて説明してくれた。「少しの牛乳をきれいにするには、たくさんのお水を使っただけで、限られた水で生活している地域があるんだ。モロッコ東部では、一日に一人あたり何リットルの水を使っているかと思う。」と言われた。私は突然の先生の質問に答えることができなかった。答えは、何とたたった十三リットルだった。つまり、私が実験に使った水よりも遙かに少なかったのだ。一方、日本人は一日に一人あたり約三百リットルの水を使っていることも知った。

ヨルダンの水不足は、遙か彼方の開発途上国の問題だと片付けてしまつてよいのだろうか疑問を抱いた。たまたま日本に私が生まれただけであり、使える水が満たされているだけである。牛乳の実験とヨルダンの話を踏まえ、身近にできることを家族会議で話し合った。話し合いで出た結果、洗剤物に使う水を減らし、汚水を浄化する水を減らすために、食器を水で流す前に新聞紙で汚れを一度拭き取ってから洗うようにした。これからは、我が家の取り組みを友達にも広めていきたい。

# 入選

## 甘い水

愛知県 知立市立竜北中学校

二年 盧 嘉琪

「えっ、水道水って直接飲めるの?!」

私が二〇〇八年に中国から来日した当初、一番驚いたのは日本の水道水が直接飲める事だった。ある時、友達と近くの公園で遊んでいた時、彼らは水道水の蛇口をひねって、そのまま水をごくごく飲んでた。その光景を見た私は片言の日本語で「大丈夫?」と聞いていたが、友達は平気な顔をしながら、「全然問題ないよ。」と笑っていた。

本日に日本の水道水は直接飲めるの?細菌がいっぱいじゃないの?その後、日本人が水道水を直接飲む光景を見る度に、私はその疑問が頭をよぎった。

中国にいた時、「飲む水」と言えば、必ず水道水を沸かしてからでないと飲めない。小さい頃から、

「水道水はそのまま飲んじゃいけないよ。お腹を壊すからね。」

と教育されてきた。放課後、いつも私はおじいちゃんや水道水を沸騰させ、そしてさましてくれた「白湯」を飲んでた。水道の水をそのまま飲むことはなかった。記憶の中、水道水はいつも消毒薬のような匂いがある。

でも、私はよく日本で「この水がうまい。」と聞く。普通の水道水は味があるの?どんな味がするのだろうか?不思議に思う私はある時、日本人の様に水道水を飲んでみた。

(あつ、薬品の様な匂いがしない。)

水は、無色透明でもまるやかで少し甘い味がした。「おいしい。」これまで飲んできた白湯とは全く別物だ。中国で考えられない事が日本では当たり前なのだ。

日本は安全で衛生的なおいしい水道水のために、全国の水道事業者が三百六十五日二十四時間体制で、厚生労働省令で定められた水道水の基準を守って、水質管理を厳しくチェックしている事が分かる。よって、日本が「いつでもどこでも」蛇口から出た水がそのまま飲めるのはこの厳しい管理のおかげである。私は日本の水道水を「おいしい。」と言う意味が分かるようになった。

しかし、日本人は当たり前のように水道水を飲んでいるが、世界基準で考えるとこれは凄い事だ。なぜなら、水道水が飲める国は世界でもわずか十一カ国。

沼や池などの水、人手で掘った浅い井戸の水を使用して生活している人も世界中に大勢いる。日本は浄水の技術がとても優れていて、自然にも恵まれているからおいしく飲めるのだが、世界ではきれいな水が簡単には手に入らないのだ。

かつて昔の日本でも近代農業用水の為に、色々な工夫をした。来日後のある日、私が家の近くを散歩していると、そこには明治用水緑道があった。所々に看板が立っており、明治用水の概要、歴史等を紹介していた。今年には明治用水通水百三十周年となり、愛知県安城市、岡崎市、豊田市、知立市等の流れ、管水路化された水路の上は、散歩道や自転車道、流水帯等が作られ、地域の人々に広く愛用されている。

このような素晴らしい水に恵まれているが、汚染もひっそりと進んでいるのが日本の現状。お父さん(日本人)が小さい頃近辺でたくさん見られた蛍も、今は姿があまり見られない。また、水道水中に放射性物質が見つかり、飲めなくなってしまう所もある。安心でおいしい水はいつまで飲めるのだろうか。次世代に残せるのだろうか。それが今の日本の一つの大きな課題である。そして、きれいな水を保つため、私達には何ができるのか。

毎日水道水が飲める事を当たり前にしないでほしい。澄み切っている水が飲める事を幸せに感じてほしい。そして、地球上にわずか〇.〇一%しかない飲める水を大切にしなければならぬ。なぜなら、それは、私達を育てくれた命の母なのだから。

感謝の心を持って、私はこれから、一滴の水も無駄にしない。そしていつの日か、世界中の人々がきれいな水をそのまま飲める日が訪れる事を祈るばかりである。

# 入選

## 水はみんなのもの

京都府 京都学園中学校

二年 辻 晏奈

「ただいま、あれ？花買って来たん？」「ひろてきてんで。」ほのかに花の香りがする方へ目を向けた。私の大好きな桜だ。母が天神川の桜並木で落ちていたのを持ち帰ったそうだ。「水につけたけど元気がなさそうやる。」その桜は満開だが、蕾が5つか6つ残っていた。上手に水揚げして元気になってね。私は強く願った。翌朝、ワクワクしながら桜を見ると、1つの蕾が開きかけていた。「良かった、水を吸えたんだ。」益々満開が待ち遠しくなった。あともう少しと思う間もなく、蕾はすべて開花した。水の力は凄いと、つくづく感じた。

3月2日14時56分、東日本を襲った未曾有の巨大な地震と津波。車や人間、家、全てを津波に飲み込まれた被災地の様子をテレビで目にした。町は跡形もなく、そこには荒地が広がっていた。避難した人々は寒さを堪え、必死で体を温めていた。アナウンサーが「水が足りていません。」「水を送ってください。」と訴えていた。私は「えっ蛇口から水は出ないの？」と疑問に思った。私の中では水に対する心配が考えられなかったからだ。しかし、辛い状態の中でも、悪態をつかず回りを思いやる心に「又、一から頑張ります。」と笑顔で話されている姿に私は、恥ずかしくなると同時に、大きな勇気をもたらした。私もよくよとしてられない、今の私に何が出来るのか？

だが、被災地は私達が考えているよりも遥かに酷い状態のはずだ。少しずつ届く水で、どのように一日を過ごしているのだろう。トイレは？お風呂は？飲料水は？大丈夫なのか？京都に住む私達は、実際に現地へは行く事ができない。まずは、被災地の人と同じ気持ちになって考えてみる。それが今の私に出来ることだと思う。だから「24時間断水」をして、被災地と同じ生活を体験する事にした。

私は3人家族。2ヶ月間、上下水道料金は10,967円も使っていた。使用量は35立方メートル。午後6時から24時間、家族で蛇口をひねらない約束で、いわゆる断水の状態で過ごすことにした。あるのは、前日の残り湯、桜の花びんの水、500mlペットボトルの水、おけ一杯分、米のとき汁、ホウレン草の

下ゆで鍋一杯分。それだけで一日過ごさなければならぬ。まず困ったのがトイレ。お風呂の残り湯、バケツ3杯分をひたすらトイレに流し続けた。いつもは軽く一瞬で流れるのに、今回は汗をかいた。お風呂に入る時も、両親の事を考えて残り湯を使わなければならない。だから、少しずつ少しずつ湯を使った。こんなにもまわりの事を思いやって水を使ったことがない私にとって、この体験は思ったよりも苦痛だった。やらなければよかったと後悔する自分もいた。朝顔を洗う時、ついいつもの癖で蛇口をひねってしまった。無意識に水を使う習慣になっていたのだ。恵まれた環境にいるんだと改めて考えさせられた。

「24時間断水」を体験して、どれほど生活に水がかかせないものか体中で感じた。京都の水は約99%は琵琶湖から、取水している。残り3%は宇治川だ。水道局の人は7つの工程を経て、私達に安全かつ綺麗な水道水をいつも届けてくれている。私達はそれがあたり前だと感じてきているが、それは違う。間違っている。水を大切に思い、浄水場で働く人がいるからこそ、水に自由な生活が成り立っている。人間は決して人間だけで生きていくわけではない。人間だけの水じゃない。家の桜も地球上のすべての動植物にも水はかかせない。水はみんなで分け合い、共用するものだ。人間の身勝手な乱用するものではない。

私は、みんなの命の源、水をこれからも残していく為に、水についてよく知り、地球上の全ての生物と水を分け合える人になりたい。

[Water is everyone's one!]

# 入選

## 水の恩

奈良県 山添村立山添中学校  
三年 中 暖子

「人の恩は返せても、水の恩は返せない。」と言うことわざを、新聞の投書欄で見つけました。投稿者は七十九歳の方で、お母さんに聞いたという話でした。私の知らない古いことわざです。このことわざを聞いて、「ああ、確かにそうだなあ」と思いました。人が自分のために何かしてくれたとき、自分もその人の手助けをすることによって、その人への恩返しになります。

しかし、水に何かしてもらっても、私たちはなかなか恩返しできません。水は、私たちの生活に必要なことをいろいろしてくれています。

私は小学生のときに、川の水の行方を調べたことがあります。山の中で湧き出た水が、一番初めにしたことは、山の棚田でお米を育てることです。少ししかない湧き水を留めて田んぼを耕やし、次々と下の田んぼへ流して米作りをする工夫を、祖父に聞きました。毎年、田植のころになると、祖父は、

「水が留まらん。」

と困っています。でも、

「きれいな湧き水で作る米は一番おいしい。」

と、祖父は自慢します。私が小さい頃は、横の川でサワガニやメダカをつかまえて遊んでいました。谷川を流れ落ちる水は、昔は水車を回し、仕事をしていました。

私は、毎日ダムの周りをバスで通学しています。冬の寒い日は、水面から霧が立ち上って、幻想的な景色です。夏は湖面に山の緑が映り、すがすがしい気分になります。ダム湖を見て、心を落ち着かせる人も多いと思います。

そのダムの水が水道水になって、私たちの生活に使われていることは、言うまでもありません。また、灌漑用水として、田畑を潤し、作物を育てたり、再び浄水場で取り入れられて水道水になったり、繰り返し繰り返し何度も使われながら、下流へ流れていきます。水辺の景色をつくり、生き物を育てています。海へ行ったら、楽しいレジャーの場になります。海の生き物を育てて、魚を育てて、私たちの食料にもなります。水の恩は、深いです。

でもそのありがたい水が、津波や川の氾濫を起こすと、ニュースに取り上げられて、大きく伝えられています。津波で何万もの命が奪われたことは悲しいことですが、同じ水が福島第一原子力発電所を冷やし、被害を抑えるために使われています。水が少しでも人間に被害をもたらしたら、大きな騒ぎになるのに、水が人間を助けてくれたときは、全然ありがたさを感じず、当たり前のようになってしまうのではないのでしょうか。

昔の人は、今よりもっと不便な生活の中で、水を大切にし、水の力を上手く使っていたと思います。水にも恩を返してきたのではないのでしょうか。水を敬っていたのではないのでしょうか。『水神』と刻まれた古い石碑が、ダム湖畔の公園に奉られています。ダムで水没した川辺にあつたものを、移転したようです。村はずれの大きな井戸に、しめ縄がはつてあるのを、見たこともあります。私の家でも、お正月に井戸の神様にお供物をしていることを思い出しました。

このように、水の神様を信じ、奉り敬うことは、現在にも続いています。昔から水が大切に、水に恩を感じていたからだと思います。

「水の恩は返せない」けど、私も毎日の暮らしの中で、水に恩を感じ、水を大切に生活をしていきたいと思えます。

## 入選

### 「今私が思うこと」

山口県 光市立大和中学校

二年 大田 美宙

私には四才になる妹がいます。その妹は、少し前から何か分からないことがあると、すぐに

「どうして？ どういう事なん？」

などと聞いてくるようになりました。一生けん命答えてあげても、その答えに對してまた、「どうして？」が続くこともあり、困ってしまいます。

ある時、いつもの妹の質問せめが始まりました。その日の質問は、水道のじゃ口を見て

「どうして水が出てくるん？」

というものでした。毎日使っている水道や水だけけど、いざ妹に聞かれるとすぐに返事をするのができずに、適当にごまかしてしまいました。この出来事をきっかけに、水について考えてみようと思いました。

私は、小学四年生の時に、社会見学で浄水場を見学しに行ったことがあります。浄水場では、河川から取水した水や地下水などを、しっかりと浄化、消毒し、私達の家庭の上水道へと供給してくれていました。それも、七段階もの行程を経てです。じゃ口をひねれば簡単に手に入る水の裏には、たくさんの人達が働いて安全を守ってくれていることも学んだのに、便利な生活ですっかり忘れていました。

三月十一日午後二時四十六分。日本の東北地方は、マグニチュード9.0の地震と津波によって、大きな被害をうけました。テレビに映し出された映像は言葉を失うくらい、すさまじいものでした。何万人もの死者や行方不明者。津波に流され、がれきと化した家の前で泣きくずれる人々。余震が続く中、東北の方々の避難所生活が、その日から始まりました。電気、ガス、水道のライフラインといわれる全てが絶たれている状態での生活は、想像以上に大変そうでした。その中でも、水がないことが人々を苦しめていました。飲み水は、もちろん必要ですが、トイレを流す水、洗たくする水、歯や顔、手を洗う水…。数をあげれば、きりがなくらいです。この

ことから、私達の生活には水が不可欠なものだということが分かります。被災された人達は疲れ果てた体で長い列に並んで、やっともらったわずかな量の水を、大切に使用して頑張っておられました。そして、プールに貯まった雨水をトイレに利用する工夫もしておられます。

水道が機能している周辺の地域でも、原発の放射能もれの問題で、安心して使えない方々が大量いらつしやいます。

人間が生きていくうえで、こんなにも水が大切で必要なものなのだと、今回の震災が教えてくれたように思います。ごく当たり前だと思っている生活は、守られてつくられていたのと思いました。

被災された方を応援するために、物資や義援金は大切だと思うけれど、それ以外でも自分達にすぐできることは、たくさんあるような気がします。それは、限りあるさまざまな資源を大切にすることです。私達人間は、災害もふくめて、自然の中に生かされている生き物だと思っております。

飲む水は、きれいでないと嫌なのに、海や川には、たくさんゴミが捨ててあるなんておかしいです。そして悲しいです。

なくなると困る水なのに、水を出しっぱなしにして無だ使いする…。今すぐやめられます。インターネットで調べると、歯みがきの30秒間の出しっぱなしをやめるだけで、5リットルの節水になるそうです。

自分がやろうと思えばすぐできるようなとっても小さなことでも、毎日積み重ねていくことが大切だと思いました。

また、妹の「どうして？」が始まったら、今感じていることを伝え、お手本となる行動で共に成長したいと思います。

## 入選

### 「大切な水を守るために」

香川県 高松市立国分寺中学校

三年 清水 美吹

「皆さんが水を使うということは水を汚しているということなんですよ。」これは、私が六年生の時に見学に行った香東川浄化センターの方が言った言葉だ。そして、今でもよく覚えている言葉でもある。その日を境に、私の水への考え方が少し変わったような気がする。

夏休みの宿題の為に小学三年生と六年の時母と妹の三人で香東川浄化センターで行われていた、夏休み親子下水道見学会に参加した。三年の時はよく理解できなかったが、六年の時は驚いたり、納得することが多かった。一番驚いて、今でもよく覚えているのは私たちが使い、汚してしまった水を、肉眼では見ることのできないほど小さい微生物たちがきれいになっていることだ。ミドリムシ、アロミドロ、ツリガネムシなどの多くの微生物たちが、私たちが毎日大量に使い、汚してしまった水をきれいにしてきている。微生物たちのお陰で私たちはきれいな水を使うことができる。浄化センターの中を案内してもらい、水が少しずつ浄化されることを教わった。

夏休み前のことだった。母に私が夏休みの課題で水の作文を書くことを伝えると、「今の子は、水のない生活なんて分からないよねえ。」と少し、嫌な顔をして母の小学生の頃の話始めた。その頃の母の住んでいた家は、山の上部にあり、水道ではなく井戸だけの生活だったそうだ。雨が少ない時期は母の祖父が毎日井戸の水を確認して、「もう水が少ないから大事に使うように。」と言われて、家族全員で水を大切に使ったのだと、母はため息をついて言った。「大変だったよ。明日になったら水がなくなるかもしれないから、まだ小さかったけど、怖かったし、本当に少しずつ水を使っただよ。でも、本当に水がなくなっちゃってね。」と笑いながら昔の苦労話を続けた。いくら蛇口をひねっても、水は全く出ずに、さあ、今日からどうやって生活するのか、大人で話し合ったそうだ。お風呂や食事は、隣の親せきの家で済ませることにして、夜は、家へ帰って寝るだけの生活。今でも忘れられない思い出だと母は言った。もし、明日蛇口をひねっても水が全く出なかったら、私の家も親せきの家も水道だけ

なので、母のように頼るところもない。食事も作れない、お風呂も入れない、その状況を想像しただけでぞっとした。母の話よりも、もっと悲惨な映像をテレビのドキュメンタリー番組で見たことがある。カンボジアに住む幼い子どもたちが池や水たまりの水を飲み水として、おいしそうに飲んでいて、水は濁り、見ただけで不衛生で危険だと分かった。井戸や水道もなく、水不足の為に、不衛生な水を飲んでいる国は多く、私たちのように清潔な水を飲める国は少ないのだと知った。そして、このような地域の人々は不衛生な水を飲んでいる為に、平均寿命は三〇代程度だということにもショックを受けた。

私は、清潔で安全な水を当たり前のように使っている。でも、それは当たり前ではなく、とても恵まれていることに気付いた。そして、安全な水を守る為、中学生の私にできることを考えた。水は流しっぱなしにせず、必要な量だけ使う。髪の毛や小さなゴミを排水口から流さない。汚れた食器は、古新聞などで拭いてから洗う。どれも簡単そうで、ついつい忘れてたり、少しならいいか、と思ってしまうことばかりだ。「水を使うということは水を汚しているということ。」この言葉を忘れず、私たちの安全な水の為に私にできる身近なことから始めようと思う。そして、不衛生な水を飲んでいる人たちがいることを忘れずに、新しい井戸造りや様々なボランティア活動などに関心を持って、多くの人が清潔で安全な水を飲める日がくることを願いたい。それが、今の私にできる、水を守り、水を大切にすることだ。

# 入選

## 「水」と人との関係

福岡県 久留米信愛女学院中学校

三年 山本 彩加

もはや、「節水」とか「エコ」といった言葉は、私達にとって、耳慣れない言葉でも、一過性のブームでもなくなつた。それどころか、企業のみならず、家庭でも老若男女で取り組み、国民生活に浸透している。そして、私も自分なりに節水を心掛けているつもりであつた。しかし、ある出来事で、私は改めて水の大切さを知る事になる。

それは、忘れもしない、中学二年生の修学旅行の帰途の事であつた。三月十日十四時四十六分、新幹線の中にいた時分、東北大地震が起きた。それを境に、水がどれほど私達が生きるために必要かという事をまざまざと感じさせられた。私は帰宅するまで、その実態を知る由も無く、テレビ画面の映像を目の当たりにして、それがどういふ事なのか把握できずにいた。まるで、知らない遠い国を見ている様な感覚で、ぼう然とテレビの前に立ちすくんでいた気がする。それらの映像は、何度見ても、未だに現実として受け入れ難い。実際に、被災地に足を踏み入れて、自分の目で見たら、どう感じるだろう。言葉を失うなどと、ありきたりな語句を使って、簡単には言い表せないに違いない。

そして、同時に驚かされたのが、いかに水という物質が必要不可欠なものであるかという事である。地震から、一日二日と経った頃水が使えないというニュースが流れた。水は、私達の日常生活において、例えば、歯磨き、飲料水、トイレ、入浴、洗濯、そして医療まで、最低限必要なものだけでも、挙げればきりが無い。

私は、おこがましいかもしれないが、少しでも気持ちを共有したいと思い、意識して過ごした。洗顔したり、シャワーを使つたりする際、『被災地の人は今も使えないんだ。』と思うと、とても不自由である事がわかつた。また、米を支給されても、水がないことには炊く事ができないという事にも気付かされた。『もし、私が同じような状況になったら、どうなるのだろうか。』と不安が頭をよぎつた。

それから、数日が経つた日曜日、私は通り掛かりの駅で、募金活動をしてい

る団体を見つけ、寄付をしてきた。そして、近くの店に買い物に寄ると、ペットボトルの水や、缶詰、パンなどが棚からこつそりなくなつていた。そこには、「震災の影響の為」という貼り紙だけが目立っていた。そのような欠品状態がどの位続いただろう。現在は、比較的、少し落ち着いた様に感じるが、とはいえ、一か月、二か月経過した今もお、輸入されたペットボトルや、少し高価な水が並んでいる。これらは、地震と津波の理由以外に、原発事故による水の放射性物質の影響と考えられる。

このような状況の中で、人々は不自由や不安を感じた。そして、それを解消するために、日本各地から水道局職員らが、被災地へ駆けつけた。彼らは水道管調査や、給水活動の他、水源の復旧にも力を尽くした。給水車は、水道が止まつた地域、特に高齢者にとっては有難いらしい。また、地下にある水源が津波で塩水をかぶつたり、ゴミで汚れたりしたため、塩分や硬度が高かつたそうだ。そこで、水源から海水を汲み出す作業によつて、水質も味も改善されたという。蛇口から水が勢いよく出た瞬間の被災者の笑顔は印象的だった。自衛隊による簡易風呂の入浴後の何とも言えぬ表情もまた忘れられない。

このように、人は生きるために、水を必要とし、その水には安全性を求める。さらに水には人の心を癒す力を持つている。私達は、この未曾有の大震災で学ばなければならぬ。人と水とが共存していくために、限りある資源である水の重要性を再認識し、さらには、水を利用して、水力発電など、無限の可能性を探り、あらゆる分野で、発想の転換をしていく事が必要なのではないだろうか。

## 入選

### 小さな一歩から始めよう

佐賀県 学校法人松尾学園弘学館中学校

三年 吉岡 未央

中三になったばかりのある日、社会科の時間に先生が、日本の輸出入について話された。その話の中で、私は気になる箇所があった。「日本は食料の半数を輸入に頼っているが、単に食料だけを輸入しているわけではない。その食料を作るために必要だった水も輸入していることになる。その水の量は、日本国内で輸入食料と同じだけの食料を作った場合、国内の水の量だけではまかないきれない量になる。」という所だった。

この話を聞いて、私は私がいままで確信していた水資源を大切にする方法等が、ほんの一部だったと気づかされたのだ。水は資源だから、無駄に使わず節水に努めることは、確かに大事な事だ。だが、今回の先生の話から思考を広げていくと、私たちの日常生活全般に水は深く関わっている。私たちは、目の前にある生活用水としての水だけを使って生きていくわけではないことが私の中ではつきりイメージできた。農作物を育てたり、食用としての畜産等の飼育の中で、家畜のエサとなる作物を育てるためにも水は使われている。

私たちは、私たちの生活そのものに使用されている水と私たちの生命維持のために使用されている表に出てこない水があることを認識したうえで、水資源の有効な利用方法を考えることが大切であるし、きちんと向き合うべきなのではないだろうか。

私は、いろいろと考えを巡らせていくうちに「多くの水の量」という漠然とした言い方では、はっきりとわからないと思う、私たちが使用している水の量を数値化した資料がないか探してみることにした。数値化したもののほうが、具体的に理解しやすいと思ったからで、パソコンで検索してみることにした。

すると興味深い記事を見つけた。それは工学博士の沖大幹氏が発表された「日本における仮想水（バーチャルウォーター）の輸出入の推計」というもので、沖氏は、グローバルな水循環と水資源の研究を柱に「水の危機の本質は、ノドの渇きではなく、食料不足による飢饉の恐れだ」と発していた。また、ロンドン大学のアンソニー・アラン教授も「モノや食料を生産するには、水資源が必

要である。国際的な食物の輸出入は、水資源が関わっているから、国際的な輸出入を考えた時、バーチャルウォーターを輸出入するのと同じことだ」とする考え方を発表していた。私は私の気づきが、国際的規模で言われていた事だとわかりとても嬉しく思った。沖氏の見解によると「食べ物を作るために必要な水は、飲み水の1000倍である」という。人間の一日の飲み水の推計は二リットルで年間一立方メートルという計算になるそうだ。また生活用水としての水は、日本人一人あたり年間一二立方メートルになるという。それらの量に加えて仮想水の量となるわけだから、私たちが使用している水資源はいかに大量なのか。飽食時代とか使い捨て時代とか呼ばれていて豊かそうに見える私たちの暮らしの一方、前回の世界水フォーラムで発表された「世界水ビジョン」では「世界六〇億人のうち十二億人が安全な水にアクセスできない状態にあり、毎年三〇〇万人から四〇〇万人が水に関連した病気で命を失っている」と警告を発した記事があった。飲み水の問題は貧困対策と同様に世界の大きな社会問題となっていることを私たちは重く受け止め、反省するべきだ。

水の星地球で同じ様に生きている私たち人類が、自然の恩恵を平等に受けられていない事実は、文明社会に在ると言い難いと思う。私が出来た事は、バーチャルウォーターを意識しながら、無駄のない生活を送る事だけに尽きる。ひとりの行動は小さいけれど、少しずつ周りに伝えていき、本当の意味で、水資源を大切に使用できたらいいと思う。少しの心がけが、多くの人々の幸福のきっかけになっていくことを信じてこれからは生きよう。

## 入選

### 守り受け継いでいく水

大分県 大分大学教育福祉科学部附属中学校

一年 土肥 温

三月十一日に東日本大震災が起こり、津波の大きな被害状況をテレビで見ても、私は言葉で失くしてしまいました。日本は四方を海で囲まれており、海の恩恵をたくさん受けて生活を営んでいます。その海が建物や多くの人々を押し流してしまつた事に、大きなショックを受けました。更に、地震の被害は東北地方だけにとどまらず、関東では液化化現象で冠水し、水道も止まってしまい、多くの人々が給水車を列を作っていました。

でも、これらはテレビや報道を通して見聞きしたことに過ぎません。被災されている東北の人達は、水や食べ物が無く、困っている人がたくさんいるにも関わらず、私達は今日も水を普通に使っている事実には、私は疑問を感じました。

また、日本は水資源に恵まれた国だと学んできたはずなのに、水は供給できず海沿いの町はその姿を変えてしまいました。これから私達は何を考え、どうしなければならぬのでしょうか。今ここで、私達中学生は中学生なりに水資源について考えなければならぬのではないかと思います。

私の住む大分県は周りを山に囲まれ、海は瀬戸内海に面しています。温泉や湧き水も豊富にあり、普段から温泉や湧き水が流れ出ている様子を見て育ちました。流れっぱなしの状態は当たり前で、むしろそれが自然からの恵みである事の証であると思っていました。でも、今回の地震でこれらが大切な水資源でもあつた事に気づかされました。私達はいつでも、かけ流しの温泉に入り名水を飲む事ができますが、もしこれができなくなつたら、私達の生活はどうなってしまうでしょう。現に今、被災者の人達は水を大切に分け合っていると聞きますが、ぜひたくに水を使う事に慣れてしまつている私達に置き換えて考えてみる事ができるでしょうか。私には考えられません。でも、考えなければならぬという事に今回初めて気づかされたような気がします。

地震で停電になつた場合、マンションや大きなビルでは、水も出なくなるそうです。水の供給にも電気が使われているという事を全く知りませんでした。水はダムや浄水場、水道管を通じて私達の家運ばれてくるという事は、知識

の上では知っています。しかし、今回のような災害が起こつた時に、私達がどうすればよいかについては考えた事がありませんでした。郊外の祖父母の家でも、災害が起こつた時の話を一緒にしました。祖父母の家では、花の水やり用に雨水を貯めて、利用しています。この雨水は、いざという時に役立つかも知れません。それから、庭には昔の井戸がありました。いつも洗車用の蛇口にながつていたので、私はそれが井戸水とは知りませんでした。随分昔からあり、年に一度検査もして使い続けているそうです。祖母は私を地区の湧水箇所にも案内してくれました。地元の人が江戸時代の湧水の時からずっと守り続けており、今も大切に受け継がれているそうです。私の知らないところで、昔の人の知恵が生かされていて、何かの時のために備えられていた事に驚かされ、少し安心できました。

私は水資源を大切にすることイコール節水だとはかき思っていました。今回祖父母や家族と話をすることで、私達の先祖が拓き守り続けていた水資源について知ることができました。私達の身近にあるこうした物に感謝し守り続けていく事も又、水資源を大切にすることにつながっていくのではないのでしょうか。私も守り受け継いでいく一人になりたいと強く思いました。

# 入選

## 水と共に生きる

大分県 大分大学教育福祉科学部附属中学校

一年 小手川 由莉

水とは何でしょうか？水は、私たち人間やたくさんの生き物たちの源にあたり私は思います。水がなければ生きていけません。人間は、飲み水、使う水、たくさんの場面で水を使います。つまり、水はなくてはならないものです。

しかし、そんな水が危機をむかえつつあります。二〇〇七年、別府市で開催されたアジア・太平洋サミットでは「水をめぐる対立は、いつ戦争に発展するかわからない」と潘基文事務総長は警告しました。私は、それほど水は戦争につながるほど重要であるのかと疑問に思いました。

蛇口をひねるとすぐ出てくる水。私たちが使った水は、川から海へ流れこみ、その後、海の水は太陽にあたたためられて水蒸気となる。これが雲をつくり、そして雨となってふたたび私たちのところへもどってくるのではないか、そう思っていました。

そこで、なぜ水がそれほど重要であるのか考えてみました。今、水を直接利用できるのはおもに、川・湖・沼・池などの淡水で、地球全体の水の量から見るとたったの0.01%弱ということが調べてわかりました。私はこの0.01という数字を見た瞬間、とてもびっくらしました。身の周りに水が身近すぎたために気づかなかったのかもしれない。

この地球は「水の惑星」とよばれています。実際に利用できる水は少ししかありませんでした。つまり、水は限りあるものであるということ。今日、地球の人口は増えつづけ、水の使う量も年々増えています。このことから、水不足に陥るかもしれないというわけです。私は対策を考えなければならぬと思います。

そこでさっそく、水道局に行ってみました。たくさんの方が働いていて、常にしんげんでした。水道局の人は、ずっと先のことまで考えているように思えました。

「限りある資源である水をうまく集める方法をこれからも一生懸命考えていきます」と働いている人は話していました。私たちもそれに協力する

必要があると思います。水の使い方を日ごろから工夫し、少しでも長く使用できるように一人一人が考える。これが今、私たちにとって一番重要になってくるのではないのでしょうか。

水はしゃべってくれません。「もう止めた方がいいですよ。」「あと少しで水不足になってしまいますよ。」なんて。水がしゃべってくれば、「あっ、止めないと。」と気づくことができるでしょうが、そんなことはありません。だから、私たち人間がいつも意識的に水を大切に使う必要があると思います。

今まで何も考えずにひねっていた蛇口でしたが、この蛇口から出る一滴一滴の水は、たくさんの方の苦勞の結晶であり、貴重な限りある資源であることがわかりました。これからはこの水に感謝の気持ちをこめて、大切に使うべきだと思います。

## 入選

### 水に対する二つの思い

宮崎県 宮崎県立宮崎西高等学校附属中学校

三年 横田 実季

「雨が降ってほしい。雨が降らないと、困る。」  
「雨が降るのは恐ろしい。」

今の宮崎県には「雨」に対して二つの思いがあります。  
現在、宮崎県ではかつて経験したことのない水不足となっています。一月以降の降水量が少なく、県内の六つの河川で流量が減って渇水状態になっています。そして七つのダム貯水率も大幅に落ち込んでいます。雨が少しでも降ると、私は水不足が解消されたのではないかと思ってしまう。しかしニュースなどでダムの貯水率はそんなに増えていないと聞き、それだけ深刻な水不足なんだと改めて思いました。宮崎県では温暖な気候を生かした早期稲作がさかんですが、水不足でその田植えができない地域もあるそうです。また田植えが済んでいても、生育が遅れたり、一部では苗が枯れ始めたり、被害が始めているそうです。生活用水にも支障が出ていて、断水を行っている地域もあります。県内の神社では雨ごいの行事が行われるなど、雨が降って水不足を解消したいという思いが高まっています。

しかしその一方で、雨による災害が恐ろしいという思いもあります。宮崎県と鹿児島県の県境にある新燃岳では今年一月から噴火活動が活発になっています。その噴火で新燃岳周辺の地域では火山灰が降り積もり、雨が降ると土石流が発生する恐れが高まっているのです。新燃岳のふもとの都市部では、「一時間に十ミリ以上の雨量が予想されるとき」高原町では、「一時間の雨量が十ミリに達した後も十ミリ以上の雨量が予想されるとき」には避難勧告が出されるそうです。避難勧告が出れば、夜中でも避難所に集まる人たちの様子をニュースで見ました。雨が降る日は怖くて夜も眠れないという人たちがたくさんいます。また、噴火も収まっていないうえに噴火による火砕流の心配も続いています。噴火活動はいつ終息するかまだ見通しが立たず、これからも土石流と火砕流の心配をしなければならないのです。

雨によって、生活が楽になる人もいます。しかし恐ろしい思いをする人もい

ます。今回、私は「水」は私たちの生活に欠かせない大切なものであり、しかしその反面災害を引き起こすかもしれない自然の猛威があることを忘れてはいけないと改めて感じました。これから私は自分ができることとして、節水を心がけたいと思います。水を出しっぱなしにしない、お風呂の残り湯を有効に使うなど身近なところから節水はできます。

雨による災害に対しては、普段から防災意識を持つことが必要になってきます。ハザードマップなどから、自分の住んでいる地域にはどのような危険性があるのかを知っておくことと危険な場所には近づかないことです。さらに、いざというときのために避難所を確認し、家族と話し合っておくことも重要です。また、テレビやラジオなどで正しい情報を得て、「自分の所は大丈夫だろう。」「これぐらいの雨なら大丈夫だろう。」という楽観的な判断はせず、非常時の心構えと準備を常におくべきだと思います。

このように私たちは「生活に欠かせない水」と「災害を引き起こすかもしれない恐ろしい水」という二つの面を持つ水と上手につき合うために、二つの意識を大切にして生活していく必要があります。

## 入選

### 私にとっての水

宮崎県 宮崎県椎葉村立松尾中学校

三年 安藤 有希

「また、水が出らんと。」

今年の冬、私達は今までにない寒さにおそわれた。私の家は、山水で、山を通ってくる黒く太いホースは、一年中むき出しになっている。そのホースを、冬の寒さが直撃した。三日以上、水が出なかった。私は、水を使えないことがいやでいやでたまらなかった。しかし、数ヶ月後、この三日間が本当にちっぽけなものだと思ふ出来事が起こった。

三月十一日、午後二時四十六分。東北、関東を襲う大地震が起こった。私は、その地震のことを学校で知らされた。頭から一瞬、何かがスツと出ていくような感覚におそわれた。私も、台風を経験しているからだろうか。他のことは考えられず、地震のことばかりを考えていた。

そして、地震から何日も過ぎた。私は、ニュースで流れていた津波の映像に衝撃を受けた。空港、家、車、田、津波は、すべてをおおいつくしていった。私は、冬の間水が出ないのがいやだと言っていた自分が情けなくてたまらなかった。東北や関東の人たちは、津波で家や家族、大切なものを失っていた。水の脅威は私達にも大きな衝撃を与えた。

しかし、水は人間が生きるために必要なエネルギー源である。私も深く水とかわわっている。

私の住む椎葉村は、九州山地のほぼ中央に位置する、山に囲まれた村である。私は、小さいころからこの椎葉の山、川とともに暮らしてきた。椎葉の春夏秋冬はともきれいだ。私は、特に夏が大好きだ。夏になると、毎日のように川で泳ぎ、魚を捕まえている。これが、夏の一番の楽しみだ。川は、暑さに負けそうな私に、涼しさとやすらぎを与えてくれる。力強い緑や黄緑の山は、小さな木陰で疲れた私をいやしてくれる。

私は、最近まで山と水が密接な関係にあることを知らなかった。しかし、今年、山と水について考えさせられた。

今年、宮崎県で雨の降らない日が続いていた。「水不足」である。県内では、

水不足の影響で米が育たないこと、木が枯れ始めたことなどが問題となっている。そして、私もその影響を身近で感じたのだ。山が枯れ始めたのである。その問題にいち早く気づいたのは、祖父だった。祖父は、山の仕事をずっとしていた。山が枯れていくことは、祖父にとって悲しいことだったに違いない。私も祖父に言われて初めて気づいた。山を見ると、大きな山林のところどころに、ポツポツと茶色い木が少しだけあった。その色は日をおう、ことに増えていった。悲しかった。

山は、雨水を利用し、土や木に水分を蓄える。そして、雨水を含んだ土地は堅くなり、木は大地に力強い根をおろすことができる。雨が降らなければ、土は乾燥しポロポロの土になる。土地の乾燥は、土砂崩れが起こる原因になることもある。私達は、知らない間に水に支えられているのだ。

私は、今年、「水のありがたさ」「水の脅威」を改めて知らされた。水があるからこそ成り立つ生活だと思った。冬に水が使えなかったことは、今になって、水の大切さを知るきっかけになったと思う。東北・関東大震災は、これから復興していつてほしい。水不足はまだ続いている。私は、これから水を大切に使うっていいと思う。日常生活の中で、顔や手を洗う時、茶わんを洗う時、様々な節水ができる。私も、私にできることとして、節水をしていきたいと思う。

私は、今までに、たくさんの方に水に助けられてきた。そして、これからも、水に助けられていきたいと思ふ。だから私は、水を思う心をいつまでも持ち続け、大切にしていきたいと思っている。

## 入選

### 流しっ放しの水

鹿児島県 池田学園池田中学校

一年 徳田 かのん

「ポタツポタツポタツポタツ……」

ある日、水道の水を流しっ放しにしている、母に怒られた。

「なんで水を流しっ放しにしているの。」

「別にわざとやっているんじゃないし、少しぐらいいいじゃないの。」

「その少しぐらいがよくないのよ。」

母の言葉はいつになく強かった。僕は不満だった。たくさん家事をしている僕の気持ちもわかってほしい。

父と母は仕事が忙しく、とても家事まで手が回らないために、ご飯たき、洗たく、雑さんがけ、窓ふきなど、家で水を使う仕事はほとんど僕がしている。はつきり言つて、水を使う仕事は好きではない。僕だって家事以外にやりたいこともいっぱいある。それを我慢して手伝っているのだから少しの水のことぐらい大目に見てほしいと思つた。しかし、そんな思いも母には伝えず、いつもの通り毎日家事をしていた。

そんな時、あの東北地方大地震が起こつた。その様子が連日テレビで放映された。押し寄せる大津波、流される家屋、自動車。倒される木々。数万人という行方不明者。避難所で生活している人々の、「水が……」「トイレが……」「お風呂が……」という悲痛な叫び声が聞こえてきた。

それを聞いて、僕はあの時僕が流しっ放しにしていた「水」のことを思い出した。あの時の僕を被災地の人たちが見たらどんな思いをされるだろうかと思つた。そう思つたら、あの時の自分がどれだけ幸せで、そして愚か者であつたかということが分かつた。僕は今までの水の使い方方を反省した。

それ以来、僕は電気や水の使用量を意識的に少なくしている。例えば、雑きんがけも乾ぶきを多くしてあまり水を使わないようにしている。また、犬のふるもシャワーを使うのでなく、あらかじめ洗面器に水をためて、それで洗うようにしている。そうは言つても、水を使い慣れていたので最初はきつかつた。僕がこんな小さなことをしても、被災地の人たちには何にもならないと思い、

やめようかとも思つた。

しかし、テレビやラジオで盛んに流されている「がんばれ日本」という言葉を聞いて考えた。この言葉は、被災地の人たちだけに向けられたものではなくて、全国の人たちに呼びかけていると思つた。「がんばれ」という言葉は、自分には関係ないと思つている人たちへの言葉であると思つた。そう思つたら、今実行していることをやめることはとてもできなかった。被災地の人たちの声なき声も聞こえてきた。

「東北地方大地震を、なぜ他人事のように思うんですか。被災地の人々の気持ちにもなつてみてくださいよ。家族を亡くし、独りぼっちになり、これからは、今を、どうやって生きていけばいいか分からない人もいるんですよ。」

僕は自分の失敗を反省した。

いつか自分が流しっ放しにしていた水がとてももったいないことだつたと分かつた。被災地の人たちには一滴、一滴の水が貴重だというのに、僕は何となくぜいたくをしたのだろうか。

また、母が「その少しぐらいがよくないのよ」と言つた意味も実感として分かつた。母は、少しもたまれば多くなるということと言つたのかも知れないが、僕には「自分さえよければいいのか」ということをも教えているのではないかと思つた。被災地のことを決して他人事のように思わず、自分のこととして考えなければいけないと思つた。

「流しっ放しの水」という小さなことから多くのことを学んだ。水に感謝しながら、今自分のできる小さなことを今日も、明日も続けていきたい。

# 入選

## 一人一人にできること

オーストラリア シドニー日本人学校

一年 蓮本 美里

私が今住んでいるのはオーストラリアのシドニーです。今から二年前の小学五年生の時に引越して来ました。シドニーに来てから数カ月後、海の見える動物園で有名な「タロンガ動物園」に行きました。動物園をぐるっと回り、出口に近づいた頃、一枚のプリントを渡されました。全て英語で書かれてあったそのプリントの意味を父に聞くと、節水の工夫について書かれてあることが分かりました。出口の所で、「シドニーウォーター」と書いてあるナップザックと定規をもらいました。

これが、私がシドニーの水に興味を持ち始めた最初の出来事でした。

ここシドニーは、日本と同じように、世界でも珍しく水道の水を直接飲むことのできる街です。でも、シドニーに住んでみると水への意識がとても高いことに気づきます。

それは、オーストラリアの降水量がとても少ないためです。日本のほとんどの地域が年間降水量が一五〇〇mmを超えているのに対し、ここオーストラリアは、大部分が砂漠地帯であり、年間降水量が五〇〇mm以下の地域なのです。ですから、様々なところで節水の工夫がなされています。例えば、庭に水まきする曜日や時間が決められていたり、洗車の時間が決められていたりします。食器洗いでも、皿を簡単に水洗いした後洗剤をつけカゴに並べ、シャワーで一気に入に流すようにするのだそうです。父がクイーンズランド州のホテルに行った時のことですが、シャワーに節水ヘッドが使われていたそうです。それは、レバーが全開になっても水が少ししか出ないようにする工夫なのでした。

私は、故郷の香川県のことを思い出しました。香川でも、水を出しすぎないようにする節水コマを配布していました。節水コマとは、水道の蛇口の中に入れて、全開にした時の水量は変わらなくても、開き具合などによって水量を調整するものです。最高五十%の節水効果があると聞きました。他にも香川県では、たくさんのため池をつくっていました。これは渇水になった時に近くの田んぼに水を引くためです。香川のため池の歴史は長く、昔から水不足と戦って

きたことが分かります。今でも、満濃池をはじめとするたくさんのため池が残されています。

数年前、シドニーではこのため池のようなシステム作りを家庭でも導入したようです。「バシックス」という、家を新しく建てる時の決まりですが、その中に、新築の家には、家庭ため池制度ともいえる雨水タンクを設置しなければならないという規則があるそうです。敷地と建物の割合から雨水が大地に染み込む量が導き出され、タンクの大きさが決められるのだそうです。そのタンクの水をトイレや洗濯、庭の樹木の手入れ、洗車などに使うのだといえます。

国は違えど、考えることは同じなのだと思いました。

私が四年生の頃の社会の時間に、昔の香川はため池もよく壊れたし、川も急で短く、川の流れがすぐ海に流れこみ、現在よりも水不足で困っていたと学習しました。それを、人々の知恵とあきらめない心で克服し、今のような生活ができるようになったのです。

ここシドニーでも、限りある貴重な水を一滴でも無駄にしないよう人々に呼びかけたり、法律を改正したりして、意識化を図っていました。

私たち人間一人一人にできることは何か、それは、誰もが生活するために必ず使う日常の水を節約することです。水を汲んだ昔と違い、水道をひねるといくらでも水が出てくるので、私たちは、水は永遠にあると思いがちです。しかし、水には限りがあります。世界規模で水不足が叫ばれている今、常にどうすれば節水になるかを考え、行動していかなければならないと思います。